

## I, ギリシアローマの文献に見られるイエス

### 1、Mara Bar Sarapion

イエスに関するギリシアローマ文献で最も古いものが、間接的な言及であるがシリアのサモサタの哲学者 Mara bar Sarapion によって書かれたものである。

おそらく73年過ぎに、監獄の中から息子に書き送った手紙で、知恵の重要性を教えようとしている。

\* \* \*

アテネ人はソクラテスを死刑にしたが、それが何のためになったか。アテネ人たちはその犯罪のために飢餓とペストに襲われた。サモス人はピタゴラスを焼き殺したが、それが何の役に立ったか。彼らはそのために、国土が一瞬にして砂に覆われた。あるいはユダヤ人が彼らの賢王を殺したことは何のためになったか。ユダヤ人は、それ以来、彼らの国を奪われたのだ。

なぜなら、神がこの3人の賢者の復讐をなさったのだ。アテネ人は空腹で死に、サモア人は津波で死に、ユダヤ人は戦いに敗れ国を追放され、あらゆるところに散り散りになっている。

ソクラテスは、プラトンのおかげで生き延びた。ピタゴラスはヘラの像のおかげで死んでいない。あの王も、自分が発布した新しい法のおかげでまだ生きている。

( W.Cureton, Spicilegium syriacum, containing remains of Bardesan, Meliton, Ambrose and Mara Bar Serapion, Rivingtons, London 1855, pp.43-48 )

\* \* \*

ユダヤ人の「賢王」についての言及は、おそらくキリスト教の文献から取ったものと思われる。しかし、これほど古い史料にすでにイエスが「賢人」と、さらに「王」と示されていることは意味深い。これは神学的解釈が入っている。70年のエルサレム破壊をイエスの死刑に対する罰と考えるのは、その頃のシリアではキリスト教徒の間で広がっていた考えであった。

また、「新しい法」の言及も注目に値する。それは「山上の説教」を暗示しているかもしれない。

### 2、フラヴィオ・ヨセフス、『ユダヤ古代誌』

小ヤコブの処刑について

フェストが死去し、アルピーノが旅行で留守であることを好機と考えた大司祭アンナスは、裁判官たちを招集し、キリストと呼ばれたイエスの兄弟、ヤコブと他の数人を召還した。そして、彼らに対して律法に違反したかどで訴えを起し、石殺しの刑に処させた。

(『ユダヤ古代誌』、XX, 200 )

\* \* \*

この処刑は62年の過越祭に起った。

「ヨセフスのキリスト証言」( (Flavianum) )

さてこのころイエスという賢人 - 実際に彼を人と呼ぶことが許されるならば - が現れた。彼は奇跡を行う者であり、また喜んで真理を受け入れる人たちの教師でもあった。そして、多くのユダヤ人と少なからざるギリシア人とを帰依させた。彼こそはキリストだったのである。ピラトは、彼が我々の指導者たちによって告発されると、十字架刑の判決を下したが、最初に彼を愛するようになった者たちは彼を見捨てようとはしなかった。すると彼は三日目に復活して、彼らの中にその姿を見せた。すでに上の予言者たちは、これらのことや、さらに彼に関するその他無数の驚嘆すべき事柄を語っていたが、それが実現したのである。なお、彼の名にちなんでクリスティアノイと呼ばれる族は、その後現在にいたるまで、連綿として残っている。

(『前掲書』、XVIII、63-64)。

\* \* \*

下線部がオリジナルで残りは後の時代の改竄の可能性大という説がある。

でわかるように、のくだりのとき、イエスは読者に広く知られた人物であったようだ。それは 以前にイエスに関する言及があったことを推測させ、の全てが後世の改竄ではないと考えられる。

それでは、どこまでが改竄でどこまでがオリジナルにあったのか。

このくだりは、キリスト教的ではないヨセフ特有の用語や表現が見られる。例えば、イエスを「賢人」とすること、あるいは「驚嘆すべき事柄」はキリスト教徒なら「奇跡」と言うだろう。また「喜んで真理を受け容れる」の「喜んで (hedoné)」の言葉は、キリスト教では否定的な意味を持つのでキリスト教徒なら使わないと思われる。

しかし、作者がユダヤ教徒であれば、決して言うはずのない部分もある。「もし人と呼ぶことが許されるなら」、「彼こそメシアであったのである」など下線部分がそうである。そして、オリゲネスはある作品で、ヨセフスはイエスがメシアであるとは信じなかったと明言している(『ケルソス駁論』I, 47)。そのため、下線部はオリゲネスが読んだ『ユダヤ古代誌』にはなかったものと考えられる。

いずれにしても、ヨセフスの書は、イエスの実在だけでなく、彼が義人であり、多くの追随者を持ち、逆境においても忠実を保った弟子がおり、ピラトによって処刑され、十字架上で死に、その弟子たちは彼が三日目によみがえり、預言者たちの予言を成就したと信じていたことがわかる。

この個所については多くの研究があるが、G.Theissen – A.Merz, El Jesús histórico, Salamanca, 2000, 2 ed. 86-95. : A.Whealey, Josephus on Jesus : The Testimonium Flavianum Controversy from Late Aantiquity to Moden Times, New York 2003.

### 3、小ピリニウス、『ピテュニアにおけるキリスト教徒の取り締まりに関して、紀元111年3月頃、同地の総督プリニウス2世がトラヤヌス帝に問い合わせた書簡』

しかし、よくあることですが、迫害が現実に行われているのに、この罪悪(キリスト教のこと。訳者注)はひろがっており、同種の事件がしばしば起っているのです。…彼らは一定の日に明るくなる前に集まり、神に対すると同様にキリストに対して一定の形式の祈りを捧げ、厳粛な誓いをたてて、団結をかためますが、それはなんらの悪い目的のためではなく、嘘をつかず、盗みを働かず、姦淫を犯さず、いつ

わりの言葉を発せず、自白を求められた場合にも誠をつらぬくための誓いなのです。それが済みますといったん別れ、再び集まってなんら害のない食事を共にするのです。これが彼らの習慣でありませぬ。…事実、この伝染しやすい迷信は町々だけに限らず、その影響を隣接する村々や農村にまで拡大されつつあるのです。

『キリスト教教父著作集。テルトゥリアヌス2』、教文館、184～187 ページを参照。

\* \* \*

イエスという人物が、死後わずか80年で、遠隔の地で、ローマ帝国の地方長官を不安にさせるほど少なからざる人から神として崇められていたことを示す。

#### 4、タキトゥス『歴史』、15、44。(115-117年)

民衆は「ネロが大火を命じた」と信じて疑わなかった。そこでネロはこの風評をもみ消そうとして、身代わりの被告をこしらえ、これに大変手の込んだ罰を加える。それは、日頃から忌まわしい行為で世人から恨み憎まれていたクレストゥス信奉者と呼ばれていた者たちである。この一派の呼び名の起因となったクレストゥスなる者は、ティベリウスの治世下に元首属吏ポンティウス・ピラトゥスによって処刑されていた。その当座は、この有害極まりない迷信も、一時鎮まっていたのだが、最近になって再び、この禍悪の発生地ユダヤにおいてのみならず、世界中からおぞましい破廉恥なものがことごとく流れ込んで来てはやされているこの都においてすら、猖獗を極めていたのである。

\* \* \*

ローマ以外で生活したことのないローマ人によってなされた、キリストとキリスト信者についての言及。

この書物の主要な写本が、キリスト教徒を後の時代に普通であった呼称“christianos”ではなく“chrestianos”と記していることは、その正銘性を表す。もし後の手が加えられたのなら、「クリスティアノス」と書いたはずである。「クレスティアノス」と「クレストゥス」という呼び方は、タキトゥスが耳にした通りを記したと考えられる。おそらく彼がユダヤ教関係の用語から派生したギリシア語の“christós”(油注がれし者)に思い至るより、“chrestós”(利益となる、有利な)を連想したと考える方が妥当である。

タキトゥスの記述には、歴史的に重要なデータがある。キリストがティベリウス時代に、ローマのユダヤ総督ポンティウス・ピラトゥスによって処刑されたこと。この人物の周囲に力強い宗教運動が生まれ、すでに60年代にユダヤから遠く離れたローマの都にもキリスト教が広がっていたことを示す。

またキリスト教徒に対してしている侮蔑的な表現は、後世のキリスト教徒による書き加えという可能性を否定する。

#### 5、スエトニウス、『ローマ皇帝列伝』

クラウディウス皇帝(41～54年)が「ローマからクレストの扇動によって絶えず騒動を巻き起こしていたユダヤ人たちを追放した」(「クラウディウス伝」、25,4)。

\* \* \*

この記述は短い史料価値は高い。と言うのは、帝国の資料館に出入りできた人物によって書か

れているから。この事件は49年に起り、『使徒言行録』18章、2にも言及されている。キリストの死後20年足らずでローマにキリスト信者がいたことを示す。またユダヤ人との軋轢が高まっていたということは、イエスがメシア（キリスト）であるという信仰が広まっていたことを示す。

## II, ユダヤ人の文献に見られるイエス

### 1, 旧約聖書以降のユダヤ人の文献

ユダヤ人の伝統は、モーセが神から受けた律法（トラー）は、書かれた法と口伝の法に分けられる。口伝の法はモーセ ヨシュア ピンハス 判事時代の知者たち・・・エストラ。エストラは120人の知者からなる大会堂を設立。この大会堂は後にサネドリンに。大会堂の最後の知者が義人シモン。

サネドリンは律法の教育を受け持ち、司法権ももった。71人から成り、神殿の付属の建物に集会所をもつ。神殿の再建から破壊までの間、トラーは各世代の二人組の知者が次世代の知者に伝えていった。義人シモンから1世紀中頃のヒッレルとシャンマイまで。

ローマ軍が神殿を包囲したとき、伝統によれば、ヒッレルの弟子ヨナハン・ベン・サッカイが逃亡に成功し、ヤブネに定し律法の教育を続ける。ここでは、受けた教えの正確な教授だけでなく、文書解釈の方法を書いた middot に従って、新しい状況から起こる疑問に答えるために、新しい教えも付け加えていった。律法の伝播は、3世紀初頭の人物、ラビとして知られたイエフダー・ハー・ナシーにまで至る。

イエフダーは後のユダヤ教に決定的な影響を及ぼす重要な決定。口頭で伝られる律法が後世消滅や忘却されることを恐れ、先代たちが伝えてくれた教えを書き留める決心。こうして編集された経典が Misná と呼ばれるもの。これ以降、全イスラエルの上に規範的権威をもつ書物として認められる。

大会堂から教えを受け継いだヒッレルとシャンマイからイエフダー・ハー・ナシーにまでの判決や律法の解釈を、Misná の中にまとめたものを tannaim, tannaitas と呼ぶ。“tanna”とは「繰り返す、伝える、教える、学ぶ」の意味。

ミスナーの編集が完了し、時間が経つにつれ、ミスナーの分量を過度に増やさないために省略した教え、またはミスナーの文で意味が不明なものを説明する必要が生じる。ミスナーの文言の解説一つ一つを baraita と呼ぶ。ミスナーをコメントしながら伝えることは、6世紀まで続く。この時代の知者たちは、amoraim, amoraitas として知られる。（“amar”は「言う、注釈する」の意味。

これらの世紀の間、東ローマ帝国下のイスラエルにとどまったユダヤ人は、より大きな安全を求めてバビロンに移住し、そこで律法の学院を建設。最も有名なのはスーラと Pumbedita のもの。

これらの学校ではミスナが解説され、疑義が生じるとトラーの章句とミスナの baraitot に通じた学者たちの様々な解釈を参考にした。これが “saboraim, saboraitas” の時代で、“sabar”とは説明するという意味。これらの議論を未来に保存し、律法の解釈に権威ある一助とするために、それらを編集し文字に残す作業が行われる。この作業を Guemará と呼び、ミスナの成立から300年の間に行われたミスナーの解釈について最も意義深い貢献を含む。

ミスナーに含まれる掟の集合と Guemará の注釈を合わせたものを Talmud と呼ぶ。イスラエルで編纂されたものを Talmud Yerushalmí と言い、その後で、またそれ故により幅広いものである、バ

ピロンで編集されたものを Talmud Babli と言う。その編集は 8 世紀の中頃に終了する。

## 2 , タルムードに見られるイエス

### a ) イエスは弟子を持っていた。

イエスは 5 人の弟子を持っていた。Mattai, Nakai, Natzer, Buni, Todá である。( TB Sanedrin VI, 1, f.43<sup>a</sup>: L.Goldshmidt, Der babylonische Talmud, Judischer Verlag, Berlin, 1933, VIII, 632 )

\* \* \*

\* 福音書の 12 人とは異なるが、最初の二人はマタイとルカのことかと思われる。Natzer はユダヤ人がキリスト教徒を指して使っていた notzrim という言葉と関係があるのかもしれない。Buni はニコデモのこと。Todá はタデオのこと。これらの名前については、J.Klausner, Jesús de Nazaret. Su vida, su época, sus enseñanzas, Paidós, Parcelona 1989, p.29)

\* 確かなことはイエスが弟子を持っていたということ。

### b ) イエスは律法を廃止するために来たのではない。

Ima Shalom は R.Eleazar の妻で、Rabán Gamaliel の姉妹だった。彼女の近所に決して買収されたことがないということで有名な哲学者(キリスト教徒、訳者注)が住んでいた。彼らはその哲学者を笑いものにしようと、彼女は哲学者に金のランプを送った。二人(イマとガマリエル)は彼に会いに行った。

彼女は学者に切り出した。「家族の財産の一部を私に分けてくれるようにしてくれませんか」(それはモーセの律法では禁じられていることだった。律法によれば、相続権は男子だけがもっていた)と。哲学者は、「あなたたちが先祖の土地から離れて以来、モーセの律法は排斥され、福音の掟(法)が与えられた。そこにはこう書いてある。『娘と息子は同様に相続権をもつ』と」と答えた。

翌日ガマリエルは哲学者にリビアのロバを送った。そうすると哲学者はこう言った。「例の本の最後の部分をよく読んでみたところ、こう書いてあった。『私はモーセの律法を廃止するために来たのではなく、それを完成するために来たのでもない』そこにはこう書いてある。『息子がいる場合、娘は相続しない』と。( TB. Shabath XV, 1, : L.Goldshmidt, o.c, I, 792 )

\* \* \*

\* これが書かれた年代は不明だが、意図はキリスト教徒の哲学者を嘲笑すること。

\* 確かに言えることは、イエスが律法の価値について問題を投げかけ、モーセの律法の価値を認めていたとユダヤ人も考えていたこと。

\* この個所の注釈は J.Klausner, o.c., pp.43-44. R.Penna, L'ambiente storico culturale delle Origini Cristiane, Dehoniane, Bologna, 2 ed. 1986, pp.264-265。

### c ) イエスはファリサイ派と同じ仕方で律法の注釈をした。

エリエゼル・ベン・ヒルカーノスは有名な学者で、ヨハナン・ベン・ザッカイの弟子。

ラビ・エリエゼルが異端(キリスト教に好意を示した)に落ちたので、逮捕され総督のもとに連行された。総督は彼に尋問し、「おまえのような老人が、これらの無意味な問題に関わるのか。」彼は答えた。「私は私を裁くお方を信じる」。総督は自分のことを言っているのだと考えたが、実際は天の父のことだった。総督は「私を信じるのであるから、私はおまえを釈放しよう」と言った。

ラビが帰宅すると、弟子たちはラビを慰めようとしたが、彼はそれを拒否した。ラビ・アキバが「君が私に教えたことを、君に言うことを許してくれ」と言うので、それを許可すると、彼は言った。「おそらく異端の一つの言葉が出し抜けに君の耳に入り、それを気に入ったので、君は異端に落ちたのだ」と。エリエゼルは叫んだ。「アキバ。君のおかげで思い出したよ。一度 Séforis の市場を歩いていると、Kefar Sekanyá のヤコブというナザレのイエスの弟子の一人と会った。彼は私に言った。『君の律法には、遊女の儲けを手にするなど書いてあるが、その金で何をするのか。大司祭のための便所か』と。しかし、私は黙っていた。すると彼は言ったのだ。『イエスは私に次のように教えられた。『不潔なところから来たものは不潔なところに戻る』と。その言葉は私の気に入った。それであの異端に傾いたのだ。なるほど、私は律法に禁じられていることを犯してしまった。『異端からは遠く離れているように』とあるのだから』と。(TB Avodá Zara I, 7: L.Goldschmidt, o.c., IX, 483-484)。

\* \* \*

109年、トラヤヌスによる最初の迫害のとき、エリエゼルがキリスト教に近いという理由で逮捕されたことが知られている。

専門家は Séforis での出来事を60年前後のこととする。それなら、イエスの弟子が登場しても不思議ではない。

『申命記』23、19の「どんな誓願を立てても、主の家に私娼の受け取る金や犬の受け取る値を持参してはならぬ。その金や値はいずれにしる、神なる主にとっていとわしいものだからである」が頭にある。これはイエスが他の律法の教師と同じように普通に律法を説明していたことを示している。

J.Klausner, o.c., pp.37-38.

d) イエスは律法学士やファリサイ派を反駁したが、イスラエルについては常に肯定的に話した。

古いユダヤ人の伝統では、イエスに関する証言のほとんどは、彼が律法学士とファリサイ派と対立したとしているが、なかには上の文のように律法をよく解釈したとするものもある。イエスに対しては批判的であるが、彼がユダヤ人であったことは認める。次の物語ではティトの姉妹の子、カトニモスの子、Onkelos というユダヤ人がティトをユダヤ教に改宗させようとするが、ティトはユダヤ教には実行困難な掟がたくさんあることを理由に断り、逆にオンケロスにも棄教を勧める。そこでオンケロスはバラアムに助言を頼むが、バラアムはイスラエルを罵った。

\* \* \*

そこで、オンケロスは降霊術を使ってイエスに尋ねた。「この世で一番大切なものは何ですか」と。イエスは答えた。「イスラエルだ。」「彼ら(イスラエル人)と一緒になれば、私はどうなりますか。」「彼らの善を求め、悪をなすな。彼らに害をなすものは、さながら神の目を打つようなものだ。」「知恵者の言葉をあざ笑う者は皆、煮えたぎる汚物の中に投げ入れられる。来て見よ。イスラエルの違反者(イエス)とこの世の国の予言者(バラアム)の違いを。」(TB Guttin V, 6 :Goldschmidt, o.c., VI, 368)

\* \* \*

ティトの姉妹の子は、おそらく Flavio Clemente だが、96年に宇宙の唯一の神を信じたために無神論者として処刑された。・・イエスを「違反者」と批判しながらも、バラアムよりもずっと

すぐれた者としている。

イエスに対する反感にもかかわらず、イエスが自らユダヤ人と考えていたこと、イスラエルを愛していたことを明らかに示しているのは興味深い。

J.Klausner, o.c., pp.32-33

e) イエスは自らを神とした。

このほかにもイエスとバラアムと一緒に登場させ、前者をユダヤ人の、後者を異邦人の代表とし、ともに誤っていることを示す箇所がある。

\* \* \*

R.Eleazar ha-Kapar は次のように言った。

「神はバラアムの声に力を与え、世界の隅から隅まで届くようにされた。それは神が諸国民が太陽や月や星、あるいは木や石のまえに跪くのをご覧になり、女から生まれた人間が自分を神とするに至り、世界全体をその悪い道に引き込もうとするのを見られたからだった。そこで、神はバラアムの声に力を与え、すべての国民がそれを聞くようにされた。バラアムはこう叫んだ。

『その人間の後について行くことのないように気をつけよ。なぜなら、(神は人間ではない。嘘をつくことではない)と書かれている。もし自分が神であるという者があつたら、それは嘘つきで自分を欺く者だ。その男は出発して最後には戻ってくると言ったが、その通りにはならなかった。彼はたとえ話を始めて、(ああ、神がこれをなさるとき、誰が生きているだろうか)と言った、と書かれていることを見よ。』バラアムは『自分を神とした者の言うことを聞くこの民の中で誰が生きているだろうか』と言った。」

Yalkut Shimeoni, 725 : J.Klausner, o.c., 33-34.

\* \* \*

Eleazar ha-Kapar は最も有名な教師の一人 Bar Kapará の父親である。バル・カパーは、3世紀中頃の偉大な編集者 Yehuda ha-Nasí と同時代人である。

このくだりは、R.Abahu の amorá に属する可能性がある。

イエス自身が自分を神として崇めた人々の態度に反対しなかったこと、彼自身もそれを標榜したことを表す。

J.Klausner, o.c., pp.33-34.

f) イエスは奇跡を行ない、魔術をしたという廉で訴えられた。

過越祭りの前夜、イエスは吊るされた(十字架につけられた、の意味。注)。40日前からお触れ役人が「この男は魔術を行い、イスラエルを忌まわしい道に引き込み、今も誘導している罪で訴えられた。彼の弁護のために何か証言したいものは、出頭し証言せよ」と触れ回っていた。

しかし、誰も弁護に現れなかったので、過越祭りの前夜に吊るされた。

(TB. Sanhedrin VI, 1 : Goldschmidt, o.c., VIII, 631-632)。

\* \* \*

イエスに対する反感にもかかわらず、彼が驚くべきしるしを召したことを否定することは出来

なかった。そこで彼の処刑を正当化する唯一の「合理的な」理由は魔術を行なったということであった。

イエスが追従者を持っており、彼らが上記の文が書かれたときもその信仰を保っていたという事実は「イスラエルを忌まわしい道に引き込み、今も誘導している」という文言でわかる。

他方、イエスが魔術を行っていたという伝えは、キリスト教とは異なった別のルートによって伝えられ、真実性をもつ。それは福音書によれば、すでにユダヤ人たちが、イエスが悪魔の頭と合意をしているという噂を立てていたことが知られているからである（マルコ、3,22）。もしイエスが人目を驚かすような行為をしなかったのなら、魔術を行なったのではなく、弟子たちがイエスの奇跡をでっち上げたと書いたであろう。

この他、このタルムードは、イエスが「過越祭の前夜に処刑された」と言うが、これは福音書と合致する。

最後にこの文の正銘性を示すのは、明確に「十字架に付けられた」とは言わず、「吊るされた」と言っているところである。ユダヤ人なら、トラーの言う「吊り下げられた男は、神ののろいである」（申命記、21、23）を思い浮かべるであろう。

この個所の詳細な分析は、J.Klausner, *o.c.*, 26-28 ; G.Theissen – A.Merz, *El Jesús histórico*, Salamanca, 2000, 2 ed. 95-97 ; R.Penna, *L'ambiente storico culturale delle Origini Cristiane*, Bologna 1986, 2 ed. 261 ; R.E.Van Voorst, *Gesù nelle fonti extrabibliche. Le antiche testimonianze sul Maestro di Galilea*, Cinisell Balsamo 2004, 139-141.

#### g) イエスの弟子たちはイエスの名で病人を治した

R.Eleazar ben Dama があるとき蛇にかまれた。ケファル・サマのヤコブが彼をイエス・ベン・パンデラの名で治療しに来た。しかし、R.Ismael はそれを止めさせて言った。「ベン・ダマよ。それは禁じられている」と。ベン・ダマは答えた。「彼が私を治すことができる証拠を見せてやろう」と。しかし、その前に、死んでしまった。

ラビ・イスマエル曰く。「ベン・ダマは幸せ者だ。知患者たちの掟を破らなかったので、今は平和のうちにいる」と。

Tosefta, Shehitat Hul-lim 2, 22-23 ; J.Neusner (ed.), *The Tosefta* Mass 2002, 1380 ; *TB Avodá Zará* II, 2 : en L.Goldshmidt, *o.c.*, IX, 518.

\* \* \*

イエス・ベン・パンデラという呼称は、ユダヤ人の文書でナザレのイエスを指す。このくだりの目的は、ラビ・エレアザルが「知患者たちの掟を破る」前に死ぬことができたという幸運を示すこと。ただ、イエスの弟子がイエスの名を使って奇跡をおこなっていたことを示している。

まとめ。イエスに直接間接に言及するタルムードの記述を紹介し続けることはできるが、それらの内容と雰囲気を知るには、上に挙げたもので十分である。



### III, ナザレの碑文

Francisco Varo, o.c. pp.3-5 の抄訳

1878年にナザレで発見された石板（縦60センチ、横37.5センチ。ギリシア語の文が22行）、《Colección Foehner》に。パリの《Cabinet des médailles》に保管。

1930年ころ Franz Cumont が解説、研究し、その文字がエルサレムで Weil によって発見された Teódoto の碑文（紀元15年と年代決定される）と酷似することを指摘。ナザレの石板は1世紀の前半のものと考えられた。文字は帝国の勅令の拙いギリシア語訳。驚くべきはその布告がナザレという当時もほとんど重要性のない場所になされたこと。帝国当局が、特にその地の住民に知らしめたいと望んだと思われる。その布告の理由は明らかにはされていない。どうも、ある最近起こった出来事とその地方全体に大きな反響を呼んだようだ。これ以上論争が広がらないような手を打つ必要があった。その布告は次のごとし。

\* \* \*

皇帝のお触れ。墓というものは、先祖や子孫や親族の宗教心を考えて作られたものであることは周知のごとくで、それらは永久に不可侵でなければならない。もし誰かが墓を破壊したり、そのやり方はともあれ埋葬されている遺体を掘り出したり、悪意をもって別の場所に移し死者に侮辱を加えたり、あるいは墓碑を消したり墓石を取り去ったりしたと認められたら、その者を裁判にかけることを命じる。その者は人々の宗教を嘲弄する者で、神々に対して同じ態度をとる者のようなものであるから。つまり、何はさておき、死者に敬意を払うことが肝要である。遺体の場所を変えるようなことはなんびとにも許されないように。もし墓地をないがしろにするなら、その者は極刑を免れえない。（1）

\* \* \*

皇帝と属州の官吏との間で交わされえた手紙はラテン語で書かれたが、勅命が布告される場所の住民がラテン語を知らない場合、その言葉は現地の通訳によってギリシア語に訳された。この場合、あまり洗練されていないギリシア語は、シリア・パレスチナ地方のギリシア系住民の言語状態を表している。

この碑文は、墓地の不可侵という古いローマ法の原則を定めている。この規定は、祖先のローマの宗教を再興したアウグストゥスから出たのかも知れない。しかし、碑文の分析から、一般手な原則のほかに、墓地の不法侵害と死体の不法な撤去についての具体的な質問に対する回答を含んでいると類推される。

この事例はティベリウス帝の治世に取り上げられ、状況をつぶさに見ると、人々の間に流されたうわさが、許容可能な範囲を超えて広がり、帝国の複雑な政治上の均衡を崩しかねない状態にまで悪化したと思われる。つまり、ある死体が墓から取り去られたと言うニュースがあらゆるところで大きな問題を巻き起こし、帝国当局者たちは農民や商人や教師や兵士たちまでの間にこの事件をめぐる議論が紛々としていることを見たのである。・・・その結果、統治者たちはこの問題は放置することができないという結論に達した。

ここまでは碑文をもとにした推理である。しかし、まだ一つの興味深い問題が残る。それは、ナザレのようなそれ以前一片の重要性も持たなかった寒村に、なぜそれほど荘厳な皇帝の布告がなされたのかと言う問題である。

この地方の当局が盗まれた死体の事件とその村を関係付けたからに違いない。・ ・

その墓が帝国の役人にわずらわしい仕事をもたらしたガリレアの村の人物とは誰か。

1世紀にはナザレはガリレアを通っていた大きな街道からは離れた孤立した村であった。その村民は数百人くらいで、大部分農業によって生計を立て、自然の洞窟か石灰岩を掘って作った穴に簡単な屋根と壁を付けくわえて作った家に住んでいた。・ ・

この村民の中で古代の記録に現れる唯一の人物は、ナザレのイエスである。彼は紀元30年頃ローマ総督ポンシオ・ピラトによってエルサレムで十字架刑に処せられた。

2世紀の中ごろ、ユスティヌスという名のパレスチナ出身のキリスト教徒が『ピラトの記録』という文書が存在し、彼自身それを参照したと断言している。その少し後、200年頃、テルトゥリアヌスはイエスの処刑に関してピラトがティベリウス帝に上奏した報告書があったと言っている。これらの文書はすでに失われているが、後代、数人のキリスト教著作家はそれから刺激を受けて『ピラトの記録』と題された書物（偽書）を著した（2）。ピラトの報告書はもう現存しないが、いずれにせよティベリウス帝の手元に届き、その答えがナザレで見つかった碑文である可能性がある（3）。

注1 . この碑文についてのより詳しい説明は、F.M.Abel, “Un rescripte impérial sur la violation de sépulture et le tombeau trouvé vida”, Revue Biblique 39 (1930), pp.567-571。この論文の中に石版の写真も見ることが出来る。

注2 . 『ピラトの記録』とその伝播については、M.Plaut, Affaire Jésus. Rapports de Ponce-Pilate, préfet de Judée, a la chancellerie romaine (Calmann-Lévy, Paris 1965)。

注3 . ナザレの碑文の評価とそれにまつわる論争については、J.González Echegaray, Arqueología y Evangelios, (Verbo Divino, Estella 2000), pp.246'253.